

## 巻頭言

# 幼児期にはぐくまれる母語の土台

## 耳のことば・目の言葉

内田 伸子

はじめに

幼児期には、子どもに、たっぷり「耳のことば」を聴かせたい。「耳のことば」をからだに刻む体験は、美しい日本語の土台をつくるために不可欠だからである。子どもに語りかけるとき、保育者は「耳のことば」を聴かせているだろうか。

### 一、保育の質を知る手がかかり

私はよく保育を見せていただく機会がある。さまざまな幼稚園や保育所の自発的活動の時間を見るとき、園の規模や方針、保育形態とは関係なく、その園から受ける、ある印象がある。その印象とは、子ども一人ひとりが充実して遊んでいるかどうかを全体として感じ取るもの



で、「いい雰囲気」というようなことは表現できるものである。この印象は、その園の保育の質を知る手がかりとなる。

「いい雰囲気」をもたらす源には三点ある。第一に、子どもから受けるものである。子どもはよく遊んでいるか。見学者がいても知らん顔で自分の遊びに集中しているか。やたら騒いでおらず、落ち着いて自分の活動に取り組んでいるか。

第二に、保育室の物的環境がかもしだす雰囲気がある。本がきちんと修理されているか。お花がセンスよくいけてあるか。ごっこ遊びのコーナーには既製品だけではなく、手作りのものも置かれているか。机や椅子は子どもの座高にあっているか。子どもの手の育ちにあわせて道具が用意されているかなど、子どもの心とからだの育ちへの配慮が行き届いた空間かどうか。保育室の雰囲気をつくりだしている。

第三に、保育者のすがた、表情、子どもに語りかけることばが保育室の雰囲気をかもしだす重要な要因だ。保育者は子どもたち一人ひとりの動きに敏感か、過干渉ではないか、歩く姿はリズムカルか、子どもに機敏にに応じているか。とりわけ、保育者が子どもにどのように語りかけているか。そのことばづかいに優しさや品が感じられるか。子どもの心に響く「耳のことば」で語りかけているか。これらのことは、保育の質を推し量る手がかりとなる。

## 二、保育者は「耳のことば」で語りかけているか

英文学者の外山滋比古氏は「わが子に伝える『絶対語感』」（飛鳥新社、二〇〇三年）の中



で、乳幼児期に語り聴かされる母語が美しい日本語の土台となると訴えておられる。子どもは胎児期から母親のことばを聞いている。誕生後はことばが埋め込まれた社会的やり取りや活動に参加するうちに母語の「絶対語感」が刷り込まれていくのである。

絶対語感とはことばを使う人が無意識にもっている「ことばの規範」であり、文法、語彙、調子、アクセントを決定するものである。美しい音楽が絶対音感を育てるように、絶対語感も美しい母語を聴くことによって身についていく。乳児期～幼児初期には、動きと結びついた「母乳語」が子どもの心にしみ込み、習慣化する。

母乳語が土台になって、動きや活動から少し距離のある、抽象的な「離乳語」が獲得されるようになる。この母乳語から離乳語への移行期に「早まって文字など教えることは子どもにとつてたいへん迷惑な教育」と指摘しておられる。この指摘は、読み書き教育に対する私の立場と全く同じだ。発達心理学には遊びや活動を通して絶対語感（音韻的意識）が習得されてからでない、文字の学習をやらせても意味はないという証拠がたくさんあるからである。

### 三、母乳語から離乳語への誘い

母乳語から離乳語への移行期には、おとき話や昔話を「耳のことば」でくりかえし聴かせることが不可欠なのだ。外山氏は「耳からことばを聴いて育つことで『聡明』になる」と説く。読み上げられた目の言葉ではなく、語りかけられた耳のことばを、くりかえし聴くことによって離乳語が身についていくのである。



外山氏はお茶の水女子大学附属幼稚園長であられたとき、子どもたちにお話の「語り聴かせ」を実践されていた。附属幼稚園では月に一度開かれるお誕生会で、大人たちは何か出し物をして、その月にお誕生日を迎える子どもたちをお祝いするのがならわしとなっている。先生がたは音楽劇をしたり、お母様たちは歌を歌ったりする。園長先生も例外ではない。園長先生の出し物は、昔話やおとぎ話の語り聴かせであった。

園長先生は文字の言葉、目の言葉で流暢に読み聞かせることはなさらない。園長先生が子どもたちの前に立たれると、子どもたちはビタツとおしゃべりをやめる。目が輝き出す。園長先生が耳のことばでゆつくりと語りかけると、最年少の三歳児ですら全身を耳にして、園長先生のことばに聴き入った。子どもたちは、月に一度のお誕生会で、園長先生から昔話を語り聴かせてもらえるのを楽しみにしていた。

### おわりに

幼児期には美しい日本語の土台をしっかり育てたい。日頃から保育者は、子どもに心を込めて「耳のことば」で語りかけていただきたい。子どもは大好きな先生のことばには全身を耳にして聴き入るはず。保育者のことばはいつの間にか子どものことばになっていく。聴き手から美しい日本語の語り手へと成長していくのである。

(お茶の水女子大学)